



十河雅典、ステップス6度目の個展である。今回の主題は「一億総災厄社会」である。相変わらずの迫力で、画廊に身を置くと総てが包み込まれ、自らの存在が消滅してしまうのではないかとこのほど、作品が体の中を抉っていく。今回は、企業ロゴは消失してはいないが影を潜め、代わりに叫びとしての言葉が襲い掛かってくる。その叫びを説明するのではなく、同質として具体的な動物、死体、化物、陰等が描かれている。しかし、具体的でありながらもその世にそれは存在しない。あの世とこの世の間で、着地点がなく、たださ迷って漂っている存在なのだ。この浮遊している存在こそ、実は我々自身の姿なのである。

細部に目を留めると物凄い速度で絵具が流れ、乾いて固定されることによってやっとその流道から解放されている状態であることを理解することが出来る。この堰き立てられる状態は、生命的な躍動感ではなく追い詰められた暴動を思い起こす。疫病、飢饉、被災という自然との拮抗ではなく、差別、蔑視、戦争といった人間が創り出した状況は、

いつでも目の前に存在し、我々が自身で我々の存在を脅かすのだ。「災厄」は入り口に飾られた十河の小品にもやってきた。吉岡がアクリルケースを壊してしまったのだ。十河は吉岡に指示を出し、小品はコラボレーション作品として甦った。人間もこうあるべきだ。

